



TITLE:

アメリカ畫帖

AUTHOR(S):

上田, 穰

CITATION:

上田, 穰. アメリカ畫帖. 天界 1931, 12(129): 3-22

ISSUE DATE:

1931-12-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161747>

RIGHT:

アメリカ畫帖

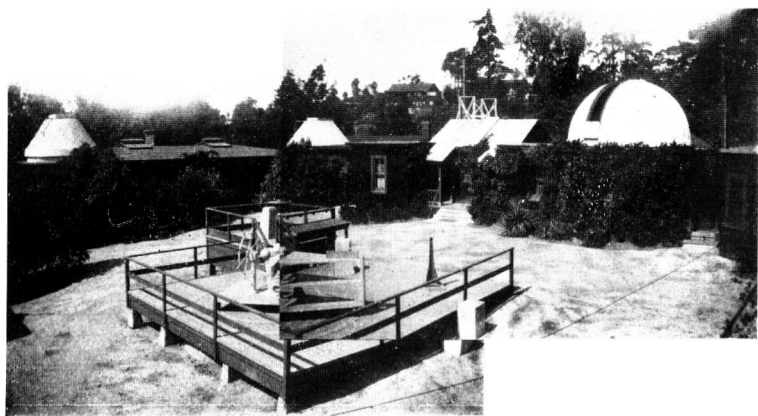
上 田 穰

1929年3月29日神戸港を振出しに、家妻同伴地球をぐるりと一廻りして
1931年5月23日もとの神戸港に歸りつくまでの旅行記の内 米國諸天文臺訪
問記を御披露いたします。

パークレイ天文臺(パークレイ)

パークレイ市は大平洋を向ふ岸へ渡りついて 自分達が初めて外國生活をした
思出の地で、人口約8萬位、サンフランシスコから灣をへだててその附近に
十數市が境を接し所謂灣東地方を形成してゐる。

加州大學はその北西部にあつて校内には高低起伏し、天文臺はその北より
の高臺にたつてゐる。寫眞はその一部であるが全て木造平家建で大學の他の

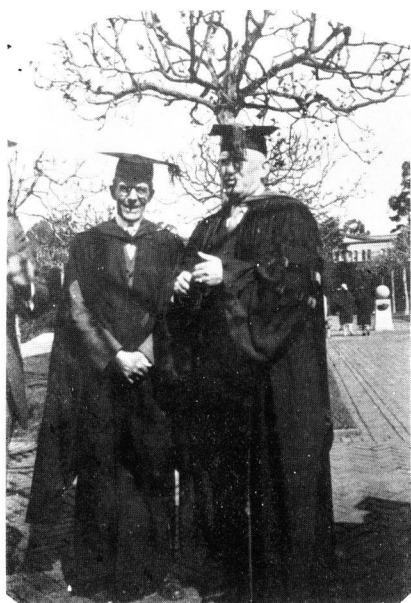


(1) パークレイ天文臺

建物に對して大きいコントラストを示してゐる。からんでゐる藤が花時には
唯一の色合を與へるものである。

ロイシュナー教授、1929年4月16日、初つの見參をした。どういつて初對面
の挨拶をしたかもう忘れて終つたがその時の様子はよくおぼへてゐる。黒つ
ぽい洋服の襟に白く フケがたまつてゐたのをみて、どこでも天文學者つての

はこれでいいのだな」と大分着古した自分の洋服を見たものである。いつも



Prof. Leuschner

ヤングが講演をした。又総長のキャンベルは赤いガウンに赤の大黒帽で威風堂々たるものであつた。

クロフォード教授夫人、Prof. Crawford はむつつり屋であるが奥様は仲々助才なく、我々には大に氣を着けてくれたものである。ピアノストで御弟子をとつてゐるが、それでゐて仲々世話女房式である。西洋ではお金の拂ひなどは男がするものだと言はされてゐたので自分も大に勉めてゐたのであるが、いつかも音楽會へ案内せられたときに Prof. は

ニコニコとして人に對する様子や、ユツクリユツクリ歩いてくる姿が目に見える様である。あれで大學では大分押しのきく位置にあるらしく、奥様の話では學校のことで主人が何につけ箸をさして見ねばならぬので健康にさゝつて困ると半分自慢せられたことである。

寫眞は1930年3月23日加州大學紀念日に職員はガウンを着て列を組んで式場にネリ込んでゆくのであるがその前に人々が談笑してゐる時のものである(右)。この式にはオーエン・



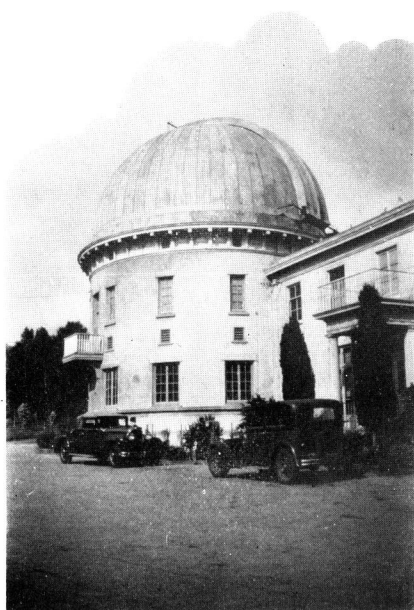
Mrs Crawford

私達と待つてゐて奥様がチャンと切符を買つて來られたので驚いたことである。少くとも天文家といふものはそれでいいものらしい。その癖奥様仲々ナンチャである。

シャボー天文臺(オークランド)

3月10日夜 Dr. Bratcher が迎へに來てくれて Chabot 天文臺を訪ふ。First Baptist Church の男子會員の集りが同天文臺を訪問するので、その肝入役であるブ氏が前言を忘れず迎へに來て呉れたのである。臺長 Prof. Linsley に紹介せられる。誠に nice man の感を得た。

レンズは口径 20 吋 ブラシヤー 製で、マウンティングは Warner & Swasey Co のもの、私の見た最初の大望遠鏡である。臺に下の銘がある。



1930 9月17日撮影

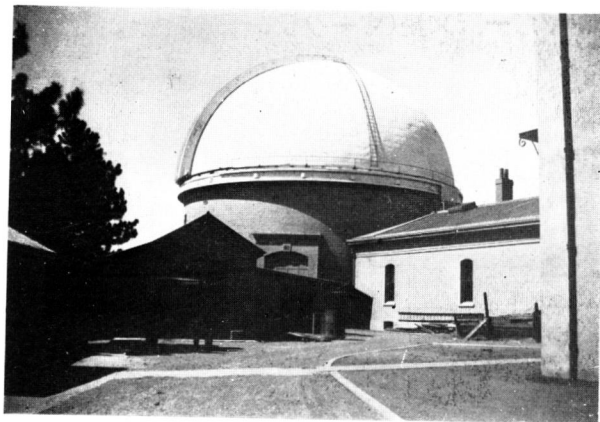
Dedicated and
named for
Charles Burkhalter
Director of Chabot
Observatory
1885—1923
“ Rachel ”

Rachel は聖書の人物でこの天文臺完成に長い苦勞をしたことを意味するのである。

Mt. Hamilton から Berkeley の National Academy of Science の會合に向ふ途中再び訪問した。

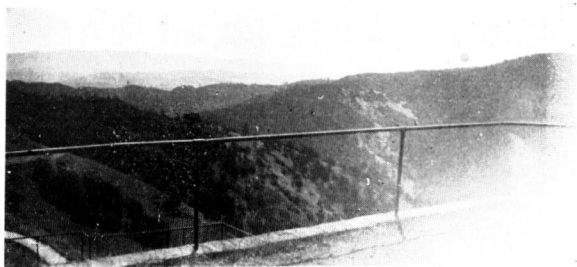
リツク天文臺(ハミルトン山)

この天文臺を初めて訪問したのは 1930年 4月12日 丁度月食のある日であつた。然し fog のため全く見る事出来ず。次には7月1日より 9月17日まで滞在



(5) 36吋大望遠鏡
のあるドーム
その直徑75呎
ドームの東北より
撮影せるもので
右側に接屬する
建物は本館の一
部、左手前の
Shed は 職工場

(6) 本館附近より
東南方を望む
左下に見ゆる欄
は頂上よりドミ
トリへゆく道



↓ コペルニクス峰

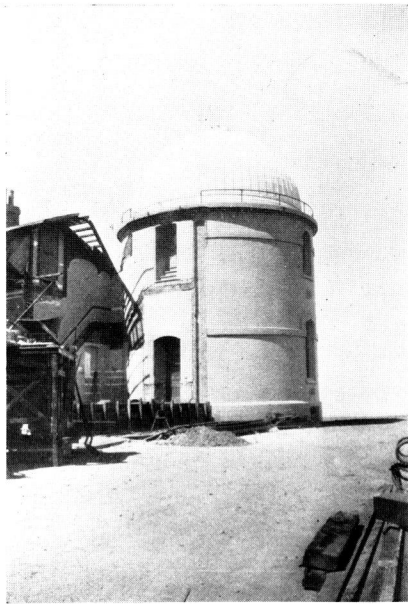
↓ ケプラー峰



(7) ドミトリヲ附
近から東方を見
た景色

誠に氣持のよい山上生活をする。

寫眞(7)の中央に見ゆる峰は Copernicus Peak で、36時ドームの上下床を動かすに要する Water tank のある所。今は使用せず、その上に look-out を増築して、火の見番が割居してゐる。一寸遠目には大望遠鏡のドームとでも見える。右方の小高い所は Kepler Peak で、今全山を養つて居る水槽があり南のスロープ約500呎下のタンクからポンプにて押上げる。水量-何萬ギャロンか忘れて終つた。北の方のスロープにも泉があつて水が得られる。手前にあるのは職工場で、階下はグラージとなつてゐる。その向ふの小高い場所にある家は Dr. Menzel の宅で前に自動車かとまつてゐるのが見える。



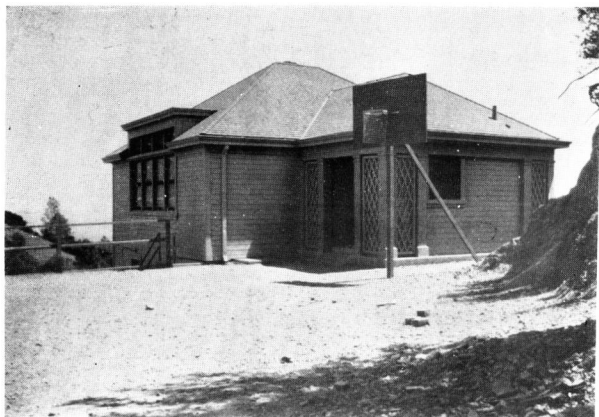
(8) 本館の北端につらなる12時望遠鏡を入れるドーム。

今本館の建物の一部は改造中にて即1929年夏には本館入口をコンクリートに改造し、今年(1930)の夏には東側の壁をコンクリートに改造中、従つて12時ドームに上る階段を取りはづして居る。今コンクリートの base が始る所である。この地下には時計室を作る由、リーフラーとシンクロノームがお互に影響するのでそれを避けるためである。自分がこゝを去るときにはコンクリートは既に打つて終つてまだセキ板が取れないと云ふ状況のときであつた。

小學校の先生は County の方から送られるので矢張りドミトリーに住んで居る。流星は選定してよこすと

見えてどの先生も——勿論一人であるが今迄のどの先生も 皆評判がいいらしい。前の前の先生は Dr. Bobrovnikof のお嫁さんになつて Ohio Wesleyan Universityへ近頃赴任した。その次の先生はつい近頃結婚のあつた筈で、山の人

々はそのお祝品を買ひに下山するのに迂回天である様に見える位である。生



(9) ハミルトン山の
小學校

徒は9人とか、家内は一度夏期休暇中の集りに行つて何か話したそうな、自分でも生徒の数がかぞへられると思ふ。臺長の小供さんは皆成人して、ライトの内は小供なし、ムアーは Catherine と Margarette だが下だけ小學校、トランプラーが子福者で、5人の中の長女はスイスで中3人が學校、ジェフアースは子なし、ノイバウワーは Phoebe と Rita 兩人共小學、メンゼルには女の子2人だがベビーさんで後3人一寸出て來ぬ。

Meridian room の望遠鏡のカバーは如何にも物々しく王座を思ひ起させる様である。今は Dr. Jeffers によつて何でもかでもラヂオ部分品の應用が認め

(10) 子午環室、
レプソルド製
6時半レンズ
はクラーク製



られる。寫眞(10)で右方に出張つた小さいのは Jeffers の office, 左の塔は氣象觀測臺でその風力計に油がなくなつて居るのかどうか知らんが、キーキー鳴つて夜になると氣になること夥しい。その直ぐ下の小さい室が Mt. Hamilton Post office で、Post Master が Dr Jeffers, その Assistant が Dr. Neubauer に Dr. Paddack. ジェフワーズは、時々勘定間違へるからハガキ 數を讀んで見て呉れと云ふ呑氣な局長さん。左に白く見えるのは下が倉庫と寫眞室、上は Dr. Trumpler の office と寫眞掛の Mr. Chappell の寫眞室。



(11) Dr. Aitken

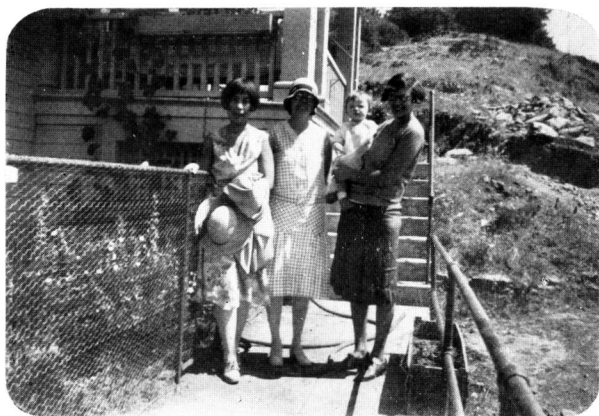


(12) Dr. Wright.

Dr. Aitken. 御自分ではエイトケンと「ト」を發音せられる。溫厚の長者と云ふ言葉で形容出来る、誠に人のいい人である。

1864年12月31日の誕生、先祖は Scotland からとのことで、昔は Durroch と云ふ姓であつた等いふ話を聞かされた。

Dr. Wright. 寫眞をとらして貰ひたいと云つたらイヤと云つて斷られた。それに無理押しの様にこんなに立たせて終つたのは少々相濟なく思つたが、それにも拘らずニツコリしてくれたのは出来ぬことである。



(13) 左より
Mrs Ueta,
Miss Potwin
Mrs Menzel

Menzel 夫人はまるで娘の子の様な奥様で、それもその筈まだ23の由、それに2人の赤ん坊がある。上はスザン下はリザベル、スザンはお母さんの目顔をよく見る利巧な子である。四つ。秘書のパトキン是我々に對してとても好意といふより好奇の心で世話をやいてくれたものである。

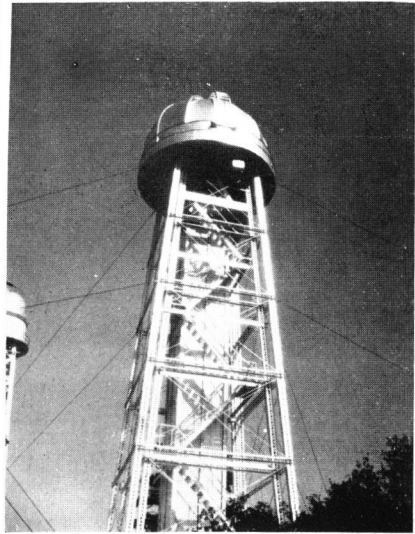
井ルソン山天文臺

パサデナ Santa Barbara St. 813 に Mt. Wilson Observatory の office がある。そこに Physical Laboratory と Optical and machine Shop があつて、この二者は同天文臺の活動に全く不離の關係をもつてゐるものであると稱して居るが、自分も全く同感である。100吋と60吋反射鏡は一年に2回 Silvering をやる、4月と10月に。その10月の Silvering が今行はれると云ふ事を Dr. Joy から聞いたので、好機逸すべからずとして、10月16日登山す。山麓の Toll gate から山道9哩半、山の高さ6000呎即ち平均10%の勾配であるから相當案じた。ある人は大したこともないと云ふし、又ある人はとてもと云ふ。前の晩 Service Station の男にきいてみたら、ヒューと口笛をふいた。とても駄目だといふ意味らしい。家内のドライブで終始し、50分で頂上を極めた。大急ぎで100吋望遠鏡のドームへ出掛け、ドームへ這つて階段を上りきると人が右往左往して居た。そしてヒョット振り返つた人が Adams だつたので、何の造作もなく一家内の人となる事が出来た。Silvering がすんで外へ出たらまだ明るかつた。

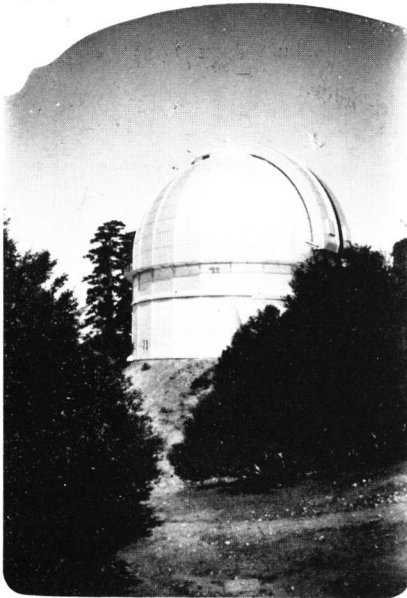
(14)



(15)



(16)



(14) 100吋鏡面水洗ひの操作中

中央の白い部分は硝子内部のインホモジニティによるもの、上部に硝子の表面に近い内部のキズが認められる

(15) 100 foot dome

(16) 60 foot tower telescope

この建物全部職工場に至るまで外部はアルミナペイントであるから實に立派に見える

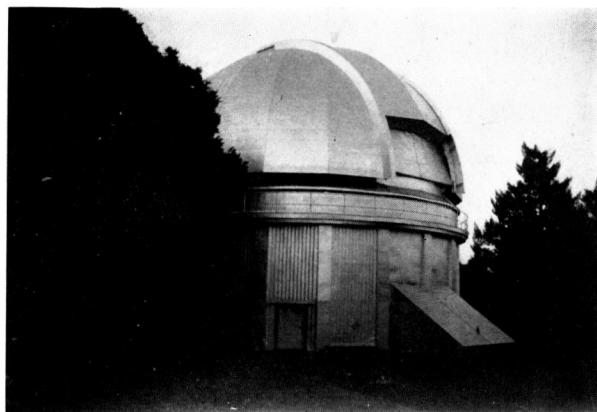
毎金曜日の晩60吋望遠鏡を一般に公開する。

まづ Hotel の Lecture room で Mr. Hoge がごく通俗の天文講演をする。「先達つても中學の地理の先生達の集りに月の山脈の話をしてみると、その中の一人が月に人が住んでゐる

かときくから、月には空氣も無く、水もなく、生物が住んで居ない事は可な

り確かだと答へると、そんならどうして其様な名前がついてゐる事がわかつ

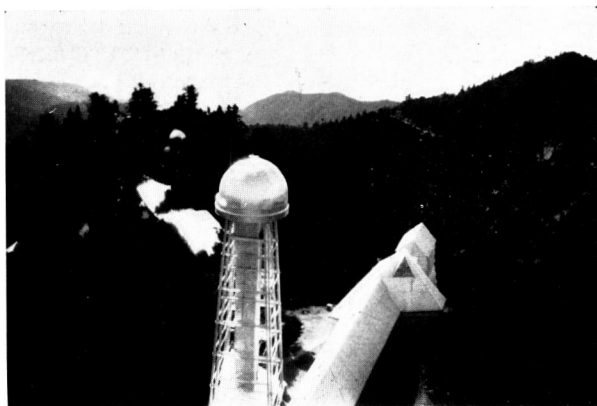
(17) 60 foot dome



たか……………」といった工合の話振りである。

講演は勿論幻燈入りで、その後導かれて 60 呎ドームにゆく、皆代る代る臺梯子に登つて天體の奇觀に見入るのである。待つて居る連中は代る代る色々な又奇抜な質問をする。それに對して一々返答するのは慣れたものである。

その晩見たものは NGC 15, 琴座の Ring Nebula と ϵ Lyrae であつた。自分はそれから 100 吋望遠鏡で Dr. Joy が觀測してゐたのでそれを見にいつた。すべてボタン一つで動くのには全く感心した。

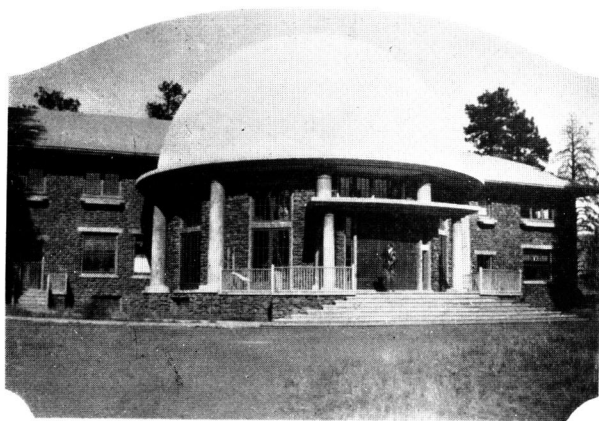


(18)
60 foot Tower
tel. and Snow
tel.

150 呎の塔上から眺めた寫眞で 60 呎の塔望遠鏡の上部とスノー望遠鏡の一部が見える。スノー望遠鏡は近來は使用せぬ由である。

ローエル天文臺 (フラグスタフ)

1930年11月8日、ローエル天文臺を訪ふ。その入口に 1.30時—2.00時まで公開とあり丁度その時刻にかゝわらず他に誰もゐないので今日は日曜でなかつ



(19)

Lowell Observatory

たかと惑つてゐるところへ二人の青年が Office の方へ來かゝつたから話しかけると一般の見物人と見て今に案内しますといふ。

そこで名刺と紹介狀を出して臺長に取り次いで貰ふ。その二青年の一人が Mr. Tomblough であることが後でわかつた。

寫眞内中央のドームは望遠鏡を收めてある譯ではない。ホールでそこに色々な寫眞が陳列してある。

臺長に會つて色々話をする、溫しやかな人である。それから御自慢の 13吋望遠鏡に案内してくれた。ドームの形は全く24吋のものに似よつて作つてある。

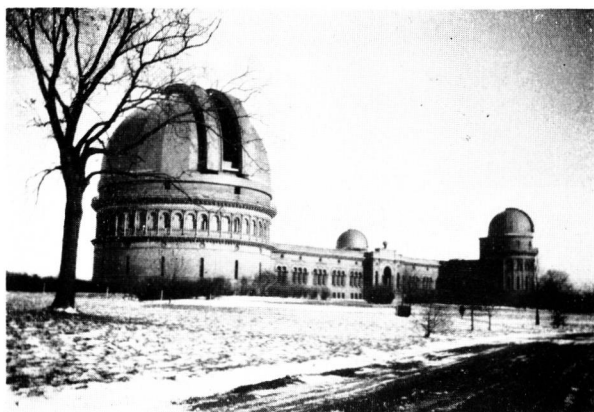


(20) 13" Refractor

レンズはロス-ランデイーン13吋乾板全體によい image だといふ。マウンティングはこの工場にて作つたもので 大分荒けづりである。尤も大急ぎで作つたからとの言ひ譯けであつた。その赤經を set する工夫は新案のもので都合よいと思つた。この寫眞乾板は大分大きいので curvature を與へる必要がある由でそれには外側四つと中央に一つの Screw でやる仕掛である。その仕掛も見せて貰ふ。

ヤーキス天文臺 (井リヤムス・ペイ)

1930年11月25日雪の中をヤーキース天文臺を訪ふ。前晚 Maywood といふ小



(21)

Yerkes Observatory.

さな町で泊つたがそこで初めて自動車のラヂエーターに **アルコール**を入れる。大分寒くなるのを覺えたからである。朝の出發が10時頃、粉雪が既にチラチラ降り初めた。Dundee といふところで晝食して外へ出ると本雪になつてゐて町から自動車から全て雪で被はれてるのを發見する。もう近くまで來たと思つた頃一老人に天文臺への道を聞くと親切に教へて呉れたのち首を捻つて「その道は阪道だからこの雪で一旦滑ると too bad だし」といつて別の道を教へ直してくれたのは有難かつた。

刺を通すると直ぐ迎へてくれて臺長室へ案内してくれた。その時セクレタリ子曰く御承知かしらぬがblindだから先づ手を握られる様にと注意せられた。臺長の手を取つて挨拶すると言下に「オー手が太變冷たいがどうして來ら

れた⁷ といはれて親の様な温かみを感じた。

近くの停車場まで、わざわざ人を迎へにやられたことを後で承知して大に



(22)

Lake Geneva

感謝した。初めて来た日には雪でセネバ湖の展望が少しも出来なかつたが28日出発の日には立派な景色が見られた。夏の日々の楽しみが思はれる。

フロストの奥様は若々しい人の様に見えたが寫眞が出来上つてみると非常に年老いて見えらる。一寸不思議だ。我々の宿をしてくれた Mrs. Riddel の話によると臺長の御母さんも眼がわるいし小供さんも片眼悪いとのことである。氣の毒なことである。臺長は自分と共に官舎から本館へ行く途中あの木は日本から取寄せたとかこの木はどうか目明きの様な説明をせられる。本當に奇妙だと私がいふと、この階段は六つある、一、二、三……と教へて本館へはいられた時には一寸淋みしい感にうたれた



(23) Dr. and Mrs. Frost

デアボーン天文臺 (エヴンストン)

1930年11月29日、雪の日しかも夕間暮餘程躊躇しながら デアボーン天文臺を訪ふ。しかし意外にも Dr. Lee はまだ office に居られて大に歓迎の意を表せられ例のオルバンクラークがシリウスの伴星を見付けたといふ、18時望遠鏡を見せて貰つた。彼は仲々の論客と私はみた。

ミシガン大學天文臺 (アンナボウ)

1930年12月1日アンナボウのデトロイト天文臺を訪問する。

大學の構内近くへきてさて何方の方に天文臺があるかと 見廻はすと直ぐとドームが眼についた。譯無く locate し得たのである。



(24) Prof. H. D. Curtis

先づ近所の Drug store で軽い lunch をとる。後でヒヨット時刻を見ると2時である。自分の時計では1時の積りがさては一時間進めるのを忘れたなと確めて見ると Chicago を出はづれてから進める筈であつたとのこと、昨日一日中一時間後れで過した譯である。

丁度 Prof. Curtis はデトロイトへ行かれてお留守とのことで Prof. Rufus が案内してくれ、又大學構内の Angel Hall 屋上の學生用の望遠鏡は女の Dr. Losch が案内してくれた。

夕方出直して Mr. Petrie の案内で 37時1/2の反射鏡を見てみるとつか

つかと上つて来るなり「自分は Curtis です」といつてキサクに握手されたのが今歸つて來られたばかりの臺長であつた。

そして御親切に甘へて一晩お世話になる。朝は Mrs. Curtis の御手料理の御馳走になつて辭去した。しかも今後の道をこまごまと教へられ、寫眞をと

りたいと云ふとわざわざ裏へ出てポーズしてくれた。

パーキンス天文臺 (デラウエア)

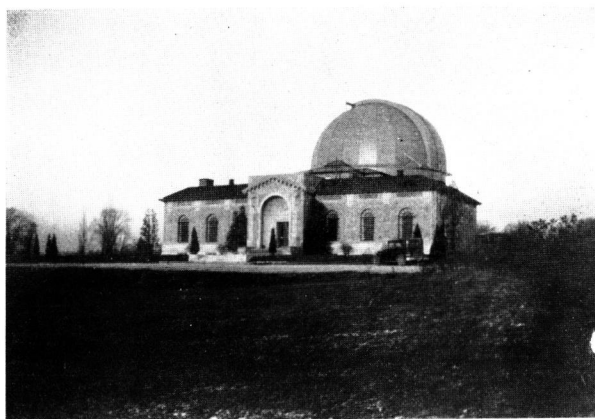
1930年12月2日 Ohio Wesleyan University の Perkin's Observatory を訪問する。Bob 君のゐるところである。夏にわかれた際訪問を約束して置いたのだが、又餘り引とめられても少々と思つて失禮する。

小使君が大に説明してくれた。歸りがけに Dr. Storer といふ人が如何にも人懐しげに引留めてくれたのを大に失禮して終ふ。

小使子曰く、ドームの直径60呎 floor より頂上まで48呎 マシンの重さ38噸 ドームは75から80噸位。

(25)

Perkin's
Observatory



天文臺で出してゐるエハガキを買ふ。口径61吋、世界第三の望遠鏡であると説明がしてある。しかし 61吋の鏡は作つた譯ではなくハーワードから58吋を借りて今使用してゐる。今度ボロ・シリケートガラス69吋といふのを Fecker が作製中で尙ほ一年位完成に要するとのこと。それが出来ると名實共に世界第三である。

アレゲニー天文臺 (ピッツバーグ)

1930年12月3日アレゲニー天文臺を訪問した。臺長 Dr. Jordan や副臺長 Dr. Burns が色々と親切に設備を見せられ、30吋の寫眞望遠鏡を珍らしく見たことである。Mr. Fecker の工場を見たりして二、三日滞在したが御天氣が

悪くて天文臺の寫眞が得られなかつた。天文臺は公園のある 高臺に位置してゐるが、畢竟煙の都であるピッツバーグを逃出さねばならないのであらう。

ダドレイ天文臺 (オルバニー)

臺長の Dr. Boss はその後學會でも會つたが氣のおけぬ人と見られた。話中に煙草を勧められ「イヤ有難う私は」といふと「ソレは bad habit だ」といふ位な調子である。こゝは夜の訪問で寫眞を得られなかつた。



(26) Observing Sun's altitude

11時(16呎焦點距離)望遠鏡 (Warner & Swasey のマウンティング) や4吋トランシットなど見せて貰ふ。望遠鏡の家の構造が一寸珍しいと思つたらこれは實はハーバードのものを真似たのでわざわざ大工が出張して見て來たとのことであつた。後で College の方々を案内して見せて下さつた臺の銘は誠にうれしく讀まれた。

スミスカレヂ天文臺

(ノーザンプトン)

1930年12月10日 スミス・カレヂに Miss Bigelow を訪ふ。

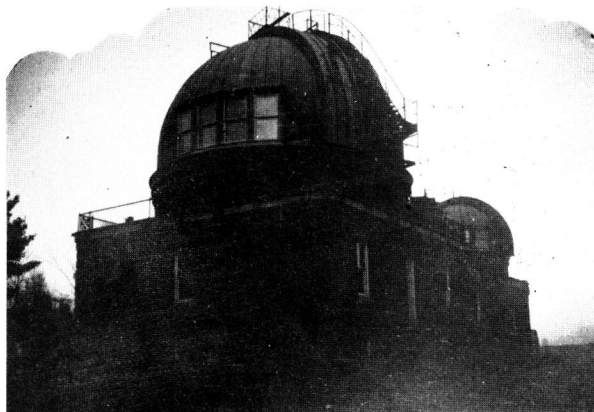
學生が庭に出て太陽の觀測をしてゐるところであつた。Miss Bigelow はまだ見えぬが、その内に來られるからと案内せられて學生の觀測を觀測する。そうするとおのづいて御覽なさいとの譯ゆゑ仰せの通り私達ものぞいて見た。中には友達の觀測をその儘寫してゆくのもあつたが但し先生には内所のことである。

This Observatory
with its apparatus is
a tribute of affection to
Henrietta Chapin Scelye
and
Sarah Tappan Williston
by their husbands A D 1886.

アムハースト天文臺

1930年12月10日 アムハースト天文臺を訪づれる。

ミス・ビケローが豫め電話してくれたが Prof. Green は丁度外出中ゆゑ Mrs Green が案内してくれるといふ話であつた。18吋オルバン・クラークの望遠鏡38呎ドームへ案内して Mrs. Greenは「私はアストロノーマでないので詳しいことはわからぬのですが」といひ掛けて、家内に貴女はアストロノーマですかと念を押すところが面白い。そうでないと家内がいふと我意を得たりと笑ふ。



(27) Amherst Observatory

辭して歸りかけるところへ小供が走り出して來てお父さんが歸られたことを報する。又カーから出て引返すと、グリーン先生、ゴルフの袋を肩にノソノソと御歸臺せられあらためて色々の話をきく。

ハーヴァード天文臺



(28) Polar telescope

1930年12月11日
この日14時頃目的地ケンブリッジへ到着した。翌日は旅の埃ををとし整理などして、13日天文臺を訪問する。出迎へてくれたのが Mr. Campbell, 大分前からお待ち

してゐましたよと云はれて、満更悪い氣はしなかつたといふのは家内の話。
直ぐ Prof. Plasket が來られ Prof. Shapley は旅行中なのでといつて方々案内
してくれた。寫眞(28)は コンコードストリートの入口から這入るとすぐの景色
でボーラー・テレスコープが目につく。

(29)

望遠鏡群

Ross Xpress→



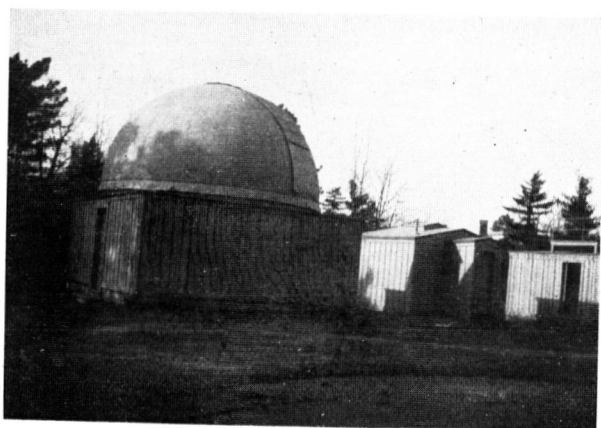
←8" Draper

←Meteor camera

3" Ross Fecker ↑
↑ 1" Cooke
4" Voigt.

16日晚ボーイ君がこれらの寫眞装置を運轉するのを見る。全く機械的にやつてゆくところに大天文臺の片影を見るやうに思つた。

正にハーバード天文臺はシャプレイ臺長の統率の下に 一糸亂れずの感があ



(30)

11 Refractor Clark

る。シャプレイがあのだ若さで大天文臺の臺長に選ばれ、又臺長にシャプレイが必要であることが合點せられた。Prof. Bailey—Prof. King—Prof. Plasket—

Assit Prof. Gerrish—Dr. Fisher—等々、12月19日 シャブレイの内でクリスマス・チーがあり自分達も招かれていつて色々な人々に出會ふ。天文臺の連中並びに大學内の天文関係の人々である。實に愉快な集りで氣持よくなる。ミセス・シャブレイは大にもてなされる。プラスチック夫人にもお會ひしたがほんとに若々しいキレイな夫人だつた。

エール大學天文臺（ニューヘーヴン）

1930年12月

プロスペクト・ストリートを兩側に目をくばりながらゆくと右手の方にドームが見えた。しかしそれが普通のドームとは一寸異つて居て教會の建物の様に見えたので不安でゐると、次に現れたのがお馴染みのルーミス・テレスコープだつたので、さてはやはりこれだつたかと合點する。セクレタリー女がシユレシジヤーのお内へ電話してくれると奥様からの電話で、教授は少々加

減がわるくてゐられるからミス・バーネイが萬事御案内またお世話をするとのことであつた。やがて來られたミス・バーネイに色々案内せられ後日を期してお暇する。

明けて1931年1月2日アメリカ天文學會會員が一緒に見物にいつた時には再び和氣霽々の中に各建物を見物した。ルーミス望遠鏡は一般の興味をひき、随分高い階段を上りそれにあきたらず老人連から婦人連まで堅梯子を上つて屋上へ出るのには少なからずビックリした。日本服ではとてもこの藝當は出来ぬと餘計なビ



(31) Loomis telescope

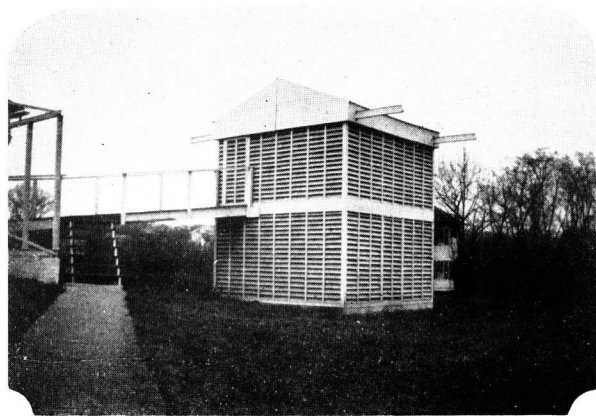
ックリをした。ステビンス教授色々説明してゐて其後この望遠鏡は餘り使つてゐる様ではないがと1月1日から大學の方で開かれた天文學會には多くの

人々が集つて誠にうれしい會合であつた。最初の日正午一同紀念撮影をする。行事の一つである。最初出掛けると顔の平たい人が人波をつきゝつて近づいて來たのでこれはシュレシンジャーと直ぐわかつて挨拶した。それから顔見知り挨拶してゐると、ヤセタお爺さんが「よう來てくれた」と挨拶されて一寸まどついたがそれがブラウンと聞かされて一寸驚いたことである。

アメリカ海軍天文臺 (ワシントン)

1931年1月7日ワシントン海軍天文臺を訪問する。玄關子に紹介狀を渡すと直ぐリテル教授に案内せられた。教授にはエール大學で面會してゐて訪問を約してあつたので、構内をすつと案内して呉れた。報時装置から子午儀子午環26吋望遠鏡それから下圖の天頂寫眞儀を見せられた。しかしすべて大速度で見せて貰つたので案内して貰つたリテル教授に相すまなく思ふ。かへりがけに Astrophysical department も almanac office も見る。かへりに途をきくと送つてやらうといつて、わざわざ送つてくれた。但カーは自分等のもつてゐたものに比べると餘程貧弱なものである。途中ガソリンを入れたのは恐縮するが勿

(32) 天頂寫眞儀



論惡氣がある筈がない。ホワイト・ハウスの附近に出てソレカラ大統領の就任の際に通るといふ行列道路を通り、各省の建築物の附近を通り Capitol の東 Congress Library までのせて呉れた。大に感謝した次第である。(完)